

熊田陽子著

『性風俗世界を生きる「おんなのこ」のエスノグラフィ―SM・関係性・「自己」がつむぐもの』

明石書店、2017年、3,000円＋税、278頁

島田有紗

本書は社会通念上の「悪」、そうでなくともアウトローでどこか危なげな領域と見なされがちな性風俗産業やその世界について、現実のその世界で働いて生きる「おんなのこ」とその周辺の人々の実践を捉えた民族誌を通して、再考するものである。

以下では本書全体の構成、プロローグとエピローグを含む各章の要約と全体の整理を行い、その上で読後に評者が抱いた疑問点を指摘する。

本書は全7章から成る。前半の第1章から第5章では調査地となった東京都心の無店舗型性風俗店、いわゆるデリバリーヘルス（以下では、本書に倣ってフォーク・タームとしての「デリヘル」を呼称として用いていく）とそこで働く「おんなのこ」、他に店スタッフ、関連業者と客たちの紹介と相互の関係性について、事例を基に明らかにされる。そして後半となる第6章と第7章では、前半での整理を踏まえつつ、自己、都市に関する人類学的研究における議論に則った考察が行われる。

なお、実際の章立ては次のとおりである。

プロローグ

第1章 性風俗世界としてのY店

第2章 「おんなのこ」として働く／をやめる／になれない／にならない

第3章 「遊び」としてのプレイがつむぐ

第4章 差異を作るゲームがつむぐ

第5章 「笑い」がつむぐ

第6章 都市に生きるということ

第7章 そして、「おんなのこ」になる

エピローグ

補論

あとがき

プロローグでは熊田の問題関心やその背景、具体的な調査地の選定とそこでの対象との関係構築のプロセスなど、研究のコンテキストが明らかにされ、それに加えて本書の構成が簡単に示される。

第1章では、調査地となったY店のコンセプトやその営業戦略、利用者を含む関係者の紹介、Y店の法的位置づけが明示される。簡単に述べるとY店はSM専門店に行くほどではないライトな愛好家、またそうしたプレイに関心を持つ一般層をターゲットにすることで差別化を図っている、いわゆるソフトSMサービス提供のデリヘルである。公安委員会への届け出済であることから適法化された場とも言え、性風俗に従来予想されがちな「違法」「裏(社会)」とは異なる公的領域に属する存在と位置づけられる。

第2章では、研究の主対象ともなるY店の「おんなのこ」がいかにして生まれ、そうでなくなるかについて検討される。またそうした「おんなのこ」にならない、あるいはなれなかった女性たちにも触れられており、それによって「おんなのこ」の輪郭、ひいてはそうした存在を作り出すY店の姿を浮き彫りとすることが目指されている。

第3章では、主対象である「おんなのこ」へと更に迫る。ここでは「おんなのこ」という存在の要と言え、客との関わりが取り上げられる。彼女たちはどんな思いを持ち、そしていかにして客たちと関わるのか。そうした問いの解明を通して、Y店で提供される「プレイ」の人類学的解釈が行われる。

Y店で提供されるプレイは、生殖という義務的行為とは区別される「遊び」としての性行為である。そうした「遊び」としての性行為は、「おんなのこ」が客の要望を否定せず、かつ合わせて演技することで成り立つ。その成立の下では「おんなのこ」と客の間でのメタ・メッセージの応酬があり、そうした複雑なやり取りを通して関係性が紡がれるプロセスそのものがY店で提供される「プレイ」なのだ熊田は分析する。

第4章では、前章と同じく「遊び」としてのプレイを軸にしながらも、Y店で働く「おんなのこ」同士の関わりに焦点が向けられる。彼女たちは客との「遊び」を成立させることを仕事としている点で互いに競合者であり、またそれはY店という空間内で設定されるルールに則っていることから、一種のゲームの参加者とも言える。

しかし彼女たちはただ合理性に基づいて競合するだけの参加者ではない。個々にゲームを理解しその理解に基づいて行動するなかでは、それぞれの個性とも言える「過剰性」が見出される。そうした過剰性によって競合が加速するとも言えるが、「おんなのこ」はそのなかでも独自の楽しみを見出し、ゲームの状況を遊ぶ。またそうした個々の差異は彼女達を競合者とすると同時に、個別の「おんなのこ」たらしめる所以ともなることで彼女達を相互に結びつけてもいると熊田は考察する。

第5章でもまた、「おんなのこ」同士の関係性に主な焦点が当たる。ここでは彼女たちが互いを結びつける独自の技法とされる「笑い」の実践が軸となる。様々な笑いの技法の利用によって、「おんなのこ」たちは結びつけられ、また客も彼女たちに受容されていく。

事務所の待機室では客、そして当事者である「おんなのこ」自身が対象となる笑いが頻

繁に展開される。そうした笑いは「おんなのこ」の自己表象となる他、共通の客に関する情報交換や新人教育の機能をも持つ。また笑いの対象とされる客はそうして笑われることによって受容され、またその受容と共有の経験が「おんなのこ」同士を結びつける。複合的な機能を付与された笑いは、Y店に在籍する「おんなのこ」や利用者である客を開かれた存在とし、包括的な関係性を作り出していたのだ。

第6章では、これまでの章で見てきた「遊び」や「ゲーム」を要素とする「おんなのこ」の仕事が成り立つ文脈の特殊性に焦点があたる。熊田はそれを匿名性であると指摘し、異質な他者同士が集合する都市的空間こそが、「おんなのこ」たちの仕事を成り立たせる上で重要だと考察する。

人類学的研究は近代的「自己」とは別の自己、他者との関係の束から自己存在を規定する視点を示してきた。しかし熊田はそうした人類学が見出した自己に還元されきらない自己のあり方を、性風俗世界の人々に見る。個々に分断された関係性の中で自在な切断と接合から生み出される都市的一部分的「自己」は、一般にスティグマ化される性風俗への従事を容易にし、また客との関係性の操作をも可能にする。こうした自己を中心に成立する関係は客側にも承知されている。他ではどんな関係を持つのか、本当のその人はどうなのかは重要視されない。多様な人が入り混じり、「本当」が分からない都市という空間においては、共に過ごす時間のなかでどんな「自己」を見せる／見せられるかが重視されると熊田は分析する。

第7章では、前章までに論じられてきた分析・考察を整理し、全体としての性風俗世界を描く。第3章から第5章まで論じられてきた「遊び」「ゲーム」「笑い」といった要素は入れ子の形で関係し、その構造は都市的空間においてこそ成立していた。そしてそれら要素を含みこむ性風俗世界で働く「おんなのこ」たちは、Y店に入り、他の「おんなのこ」や客との関わりの中かでその世界の作法を学び、「おんなのこ」となっていく。またそれはただひとつのモデルを目指した単線的プロセスではなく、各々の癖とも言える過剰性を「スタイル」としていく創造的プロセスであり、それ故に客たちは単なる「おんなのこ」ではない個人としての彼女たちと関係する。こうした一見矛盾するようなプロセスが重なり、「おんなのこ」の日常、性風俗世界は成立するのだ。

そして最後にこうした「おんなのこ」たちを中心とする性風俗世界における人々の有機的関係性の構築実践を踏まえ、「性労働」という語からは取りこぼされる実態のあることを指摘しつつ、性や労働に関わる従来の議論上での本書の位置づけが明らかにされる。

エピローグでは、本書の主役とも言える「おんなのこ」とは誰なのかという問いの解明と共に今後の展望が示される。結局「おんなのこ」とは、一見特別な存在でありながら、誰もが部分的自己の操作によって存在する都市的空間に暮らす女性にとってはその要件を満たす努力をする限りなることができ、そう目指されても良いごく普通のあり方の一例だとして、熊田は位置づける。そうした「おんなのこ」を中心としたフィールドワークの経験は、彼女のその後のオランダ調査での主な参照点ともなり、「おんなのこ」たちとの関わりやその中で得た知見との比較からその展望は拓かれ続けているようだ。

補論では風営法条文の精査を通して、性風俗営業の適法性の再考を行う。これはY店

の位置づけを示した第1章末の論考を踏まえた、性風俗と法のより広範な論考と言える。

以上のように本書は「自己」、女性、性、そして労働などの要素を、東京都心のデリヘルY店での定点観測から把握した性風俗世界の民族誌を通して、論考したものである。調査地としたY店がソフトSMサービスを提供している点や対象が比較的若い女性たち中心だったという点は特殊であり、熊田本人も言うように、本書で展開された考察や分析が都心の性風俗世界で働く女性一般に適用できるとは言い難い。しかし都心で生きる女性たちの生活を構成するひとつの実態であることは確かで、加えて日が当たりにくい部位を取りあげていることから、都市的状况に置かれたマイノリティとしての女性を理解する上では重要な視点を提供している。

先に挙げた要素のうちで、女性と性は本書の特に根幹のテーマと考える。売春、セックスワーク/性労働の議論上においてセックスワーク論の立場を取る熊田の論調には、一貫して女性の自発性や自由の保護に対する重視が伺えた。女性を主対象とするジェンダーおよびフェミニズム研究では、そうした性産業に従事する女性の解放を主張する声が基本的位置を占め、その従事の肯定を通じた女性の尊重はあまり見られない。

しかし解放や廃止の一方的主張は肯定/否定や存続/廃止などの二分的構図のなかに入りこみ、対立の再生産に陥る側面も持つと考える。そうした対立を乗り越え、より良い着地点を模索する際には、本書に記された性産業に従事する女性たちの実践やそれらの声に基づいた主張は非常に有意だと言える。

また仕事や労働を主題とする人類学的研究にも寄与できると考える。イタリア人労働者の流動的就労実践を調査した宇田川妙子は、労働=金銭獲得とする近代的価値観の相対化が、従来的人类学的議論では目指されてきたと整理する [宇田川 2016]。

本書に登場した「おんなのこ」たちは、ただ合理的なゲームのプレイヤーであるだけでなく、それぞれの客を遊ばせる中で独自の楽しみを見出していた。そんな「おんなのこ」と「おんなのこ」、「おんなのこ」と客。それぞれの関係が笑いによって紡がれることで性風俗世界は成り立ち、そうして不意に有機的性格を帯びる繋がりの中を人々は行き交っていた。こうした必ずしも金銭獲得を至上としない実践と実態は、性サービスを金銭と交換にする意味や働く価値の再考を促すはずである。また世間一般では「悪」「裏社会」とイメージされる性風俗の現場や性的搾取/被搾取者としてその関係を捉えられがちな人々のものだからこそ、そうした示唆の力も一層強くなると考えられる。

しかし他方で、記述に不十分さや疑問を感じる点もあった。まず利用者である客の記述が薄く、年代や職業、利用する背景やY店の「おんなのこ」を含む性風俗世界の女性たちへの思いなどが殆ど見えなかった点である。これは「おんなのこ」側の記述の厚さに比較すると、対照的である。本書タイトルが『「おんなのこ」のエスノグラフィ』ということから、意図的に彼女たちの声や実態に焦点化したのかもしれない。

だがそうした利用者側の姿や声の捨象は、本書が目指すセックスワークの再考に向けたエスノグラフィとしての力を弱めることに繋がると考える。そもそも「おんなのこ」たちが金銭獲得のほかに仕事に対して楽しみや喜びを見出す時、そこには利用者の変態性や面白さ、彼らに必要とされる感覚や予想外の関係構築などがあつた。つまり彼女たちのそう

した実践は、利用者の存在によって支えられているものでもある。何故彼女たちが彼らにお金を得る以外の価値を付与するのかという問いが、何故彼らは彼女たちにそうした価値を与えられ得るのかという問いと共に明らかにされることで、その記述の説得性はより確かなものになると考える。

また「おんなのこ」たちの年代的相違が見えない点も不十分に思われた。中山美里 [2016] は、近年急速に進む高齢化と共に、かつてマニアックな対象でしかなかった 50 代 60 代の女性従事者が以前より主流になってきたことを報告する。その背景には従事者や利用者となる高齢層の貧困や家族構成、生活形態の変化も考察された。

こうした性産業における高齢化は Y 店でも垣間見えている。本書の初めの部分では Y 店で接触出来た範囲で彼女たちの年齢層が明らかにされているが、20 代前半から後半がメイン世代であり、40 代が最高齢だった。他方で利用者の世代は 30 代から 50 代がメインではあったが、全体的には 20 代から 80 代と非常に幅広い。こうした明らかな男女の年代的非対称性の中で、高齢層にある「おんなのこ」や利用者それぞれの就労実践や利用の実態は、おそらく本書でメインに取り上げられた世代（「おんなのこ」なら 20 代、利用者なら 30 代から 50 代）とは大きく異なるはずである。「おんなのこ」のエスノグラフィと題するならば、メインの年代層に限らず、高齢世代にあたる人々にも焦点を向けるべきではなかっただろうか。

また対象とした Y 店がソフト SM サービスを提供しているという特殊性を持つ点についても、踏み込みが不十分に思われた。熊田は性風俗産業のスティグマ化された価値を相対化するため、従事者の「おんなのこ」の実践を含むその「仕事」の実態を捉えたエスノグラフィを描いた。「おんなのこ」は誰でもなり得る存在であるし、またその仕事の内容も一般に想定されるほど金銭獲得が至上ではなく、その他の価値も見出されるものであった。

しかしそうして性風俗産業という領域を区切る境界をぼかす作業の中で、SM というジャンルの特異さは殆ど論じられることなく、手つかずであった。性風俗産業の価値を見直そうとするならば、その下位ジャンルについてもより踏み込んだ再考をすべきではなかっただろうか。そうした内部における細かな特殊性の検討の末に、全体としての性風俗産業の価値の見直しは、より正当性を持つようになると思われる。

最後に疑問点である。第 3 章では、「おんなのこ」と客とのプレイがいかにして「遊び」として成立するかが論証された。まず前提として「遊び」とはそれに参加する双方による「これは遊びである」というメタ・メッセージの交換が可能な場合において成立するものであるとし、「おんなのこ」と客の両者によっていかにしてそのやり取りが行われているかが確認された。

客は料金を払って「おんなのこ」に会うと、自身が持ち込んだ設定やプレイ内容を提示する。客は、普段ならできないような変態的プレイをしに Y 店へ「遊び」にきている。他方の「おんなのこ」は、そうした客のリクエストを否定せず、時には演技しながら楽しんで相手をする。こうしたやり取りの下でプレイは「遊び」となる。

ここで「遊び」としての性行為と、そうでない性行為を区分する定義を述べた部分を引

用する。

生殖が義務化したとき、それは目的を達成するための手段としての性格を帯びる。それに対して、生殖を一切念頭に置かない性行為は、純粹な「遊び」となりうるからだ。(本書 53 頁)

ここからはある行為が何か目的を達成するための手段であり、行うことが手段化・義務化した場合、それは「遊び」でなくなると解釈できる。つまり手段的・義務的側面を持った時、それは「遊び」でなくなる。

改めてプレイが「遊び」となる文脈に立ち返る。そこで客は料金を支払って「遊び」の相手となる「おんなのこ」と出会う。他方の「おんなのこ」には、料金に見合ったサービス提供者として、そうした客の相手となる義務が生じている。つまりこの時「おんなのこ」にとって客は「遊び」の相手ではなく、「遊ばせなくてはならない」相手となる。

性行為が目的のための手段となるのは生殖の場合に限らず、こうしたサービス商品となった場合も含まれると考える。そうした時、客にとっては「遊び」となる行為が、「おんなのこ」にとっては「遊ばせなくてはならない」という義務の行為となる。こうした「遊び」の認識が非対称な状況において、「これは遊びである」というメタ・メッセージの交換は齟齬を含むはずであり、「遊び」としてのプレイも成立しないのではないだろうか。子ザルはそうした義務意識を持ってじゃれ合わないだろう。

たしかに「おんなのこ」は客と親密な関係を構築して遊ばせ、自らも遊ぶ。本書で示される通り、金銭獲得以上の価値をそこに見出す場合もある。しかしやはり金銭獲得を目的としている側面は Y 店に従事している時点で常に存在し、その意味を切り捨てることもできないと考える。

こうした金銭獲得目的か金銭獲得を目的としないかのいずれかに回収しない見方は、金銭獲得を至上目的とする従来の労働観を相対化する労働研究の上でも重要な視点であり、性風俗産業の価値や意味の再考を目指す上で関連するはずである。本書で一貫する主張を支え、かつ繋がりを辿ってその意味を深める上では、単純な二項図式のいずれかに依ることを避けるべきである。

しかしこうした批判や疑問点はあるものの、性風俗産業従事者である女性たちへの従来のまなごしを転換させる上で、本書は重要なエスノグラフィであることは確かである。

客を遊ばせ、自身もまたそれを含むゲームのプレイヤーとして遊ぶ。そしてそのような関係を構成する客や自分自身をも笑うことで、包括的な繋がりを生み出す「おんなのこ」たち。遊び、遊ばせ、笑う。これら技巧の習得によって「おんなのこ」は生まれ、またそんな彼女たちの存在は多様で異質な存在が入り混じる都市的空間において特に引き出されていた。性風俗産業に従事する女性たちは一般に悪や禁忌的な領域に位置づけられる。そんな彼女たちに対し、本書の論考はその就労実践やより内側で展開される関係から光を当てることにより、性風俗産業に従事する女性たちの都市的空間における存在意義への再考を促している。

<参考文献>

宇田川妙子 2016 「労働に埋め込まれた社会関係、社会関係に埋め込まれた労働—「仕事嫌い」なイタリア人の働き方」中谷文美・宇田川妙子編『仕事の人類学—労働中心主義の向こうへ』世界思想社、pp.204-231。

中山美里 2016 『高齢者風俗嬢』洋泉社。